

の対象とされることを期待する所以である。

(小林健太郎)

日下 雅義 著：

『古代景観の復原』

中央公論社 1991年5月

A5判 250ページ 2,400円

本書は、すでに『平野の地形環境』や『歴史時代の地形環境』を世に問うている著者が、その後に表示したものを中心として、若干の加筆・修正を行い、一書としてまとめたものである。

本の体裁は一般向けの啓蒙書のスタイルがとられ、写真や地図がふんだんに挿入されており、しかも論旨明快かつ平易な文章で綴られている。しかし、一読すれば明らかなように、その内容の豊富さ・レベルの高さは、前著に比すべきものがある。

本書の構成は、以下のようである。

- I. 景観の復原と遺跡——はじめに
- II. 大地はかわる
- III. 『記紀』『万葉集』に自然の景をよむ
- IV. 生活の場を復原する
- V. 生産の場を復原する
- VI. 消費の場を復原する
- VII. 景観の形成と古代——むすびにかえて

まず、I章とII章では、III章以下の本論に先立って、古代の景観を復原・検討するに際しての研究手法や留意点など、この分野の研究を長年リードしてきた著者の手の内を手際よくまとめている。多くの事例を引きつつ、まさに大地が絶えず変わっていることを実感できる章である。その中にさりりと書かれた「したがって、現在の地形や土壌の様子のみから、古い時代の環境を推定するのはよくない。」(52頁)の一文は、現地表面の地形や微地形をやや安易に研究に用いてきたこれまでの歴史地理学に放たれた一矢として、心に留めおくべき一文であろう。

III章では、『記紀』や『万葉集』に記された海岸付近で用いられた「水門・門・岸・潮・渦」などの用語を、具体例に依りつつ逐一検討している。それに際しても、著者はまず当時の景観をできうる限り復原し、その上で史料を検討・解釈しており、従来の国文学や歴史学の解釈とは一味も二味も異なる解釈を導きだしている。すなわち、「水門」が河口部を指していたことや、「門」がふたつの陸地の近接した部分を指していたことなどを明らかにしている。

古代の景観復原に、『万葉集』の歌が有益であることが実感させられる章でもある。

IV章では、大井川扇状地の三角屋敷や京都府田辺町の浜新田など内外の事例を引きつつ、低地に生活する人間と水との戦いを、地形学の側面から復原・検討している。

これに続くV章とVI章は、本書の中でも著者がとくに丹念に書き込んだ、端座して味読すべき内容に溢れる章である。まず、V章では、古代の用水を詳細に検討しており、その具体例としては裂田溝・針魚大溝・依網池・狭山池を取り上げている。裂田溝を除く3者に関しては、前著の『歴史時代の地形環境』を要約しつつ、その後の成果を踏まえて新たな見解を随所に加えている。

裂田溝は『日本書紀』に記された池溝関連の記載の中で、詳細な検討が可能な畿外での希有の事例ではあるまいか。福岡県的那珂川の右岸に位置し、安德台地上の耕地を潤す現存の「裂田水路」を中心に検討している。同じく、『住吉大社神代記』に載る針魚大溝は、自然灌漑が不可能な大阪府南部の段丘面を潤すために、東除川の水を堰き上げたものである。現地の踏査や地籍図などによって大溝の位置を復原するとともに、現在の地表面に残る水田の幅(13~15m)ではなく、検土杖によって地下に埋没しているかつての大溝の幅を6~8mと復原しているのは、著者の独壇場である。また、段丘面上を潤した後も、西を流れる天野川にその一部が流れこんで後述の依網池まで達し、「住吉堀割」によって住吉大社の門前まで達していたとの想定は、さらに十分な検討を要する重要な課題である。

古代の溜池として著名かつ重要な依網池と狭山池の復原・検討に関しては、本章に載せられた両池の復原図を一瞥するのみで、その成果のほどは明らかである。前者の依網池に関しては、近世中期の大和川の付け替えによって池が南北に分断されてしまい、現在の景観として残されておらず、正確な復原図さえも作製されていない現状であった。141頁に載せられた復原図によって、依網池の全体像がはじめて提示された。とくに、上町台地の東斜面を利用して築かれた依網池の堤防が、北側の東半分と東側のみ築かれていたとの指摘は重要である。50~60haもの面積を有したと復原される依網池の堤防の有り様から、同じく古代に築造された大規模・不整形の溜池である大和郡山市池之内町の伝・迹見池や田原本

町八尾の池跡などとの比較・検討が必要となろう。また、依網池は水深1～2mのきわめて浅い池であり、灌漑のみに利用されていたのではなく、当初からジュンサイの利用や鯉や鮒などの飼育がなされていたのではないかと斬新な提言も盛り込まれている。これなども、これまでの溜池研究から全く抜け落ちていた研究アングルである。

大阪府南部を潤す人工の灌漑用水施設として、古代で最も重要であった狭山池に関しても、これまでの通説を大幅に書き替える内容を提示している。すなわち、6世紀の中葉以降に築造されたと推定される狭山池も、その面積に関しては築造当初から現在まであまり変化がないものとこれまでは想定されてきた。しかし、詳細な復原と検討によって、築造当初の面積が20haほどであり、慶長年間の大改修によって50ha余に拡張され、昭和初期の再改修によって現状のものとなったことを述べている。155頁に載せられた狭山池の湖岸復原図には、実に多くの情報が盛り込まれており、2度にわたる大改修にともなう、堤防の長さ・高さはもとより、樋や除げなどの諸施設の位置や規模自体が大きく変えられてきたことがはじめて明らかにされた。

VI章では、海岸の地形と海岸付近に設けられた古代の港の現地比定について論じている。事例としては、おもに紀伊水門・住吉津・難波津が取り上げられており、難波津に多くの頁が割かれている。まず、紀伊水門に関しては、古代以来紀ノ川河口部の流路が大きく変化したことを述べ、その河口部に設けられた古代の港である紀伊水門の位置も、和歌浦→大浦→現在の位置へと三転したことを明らかにする。

これに対して、古代の難波には住吉津と難波津の2つの要港が位置していた。前者については、住吉大社の鎮座地や、古代のラグーンの名残である門前の池、そして長峽町の地名などから、現在の住吉大社に西接する位置に古代の住吉津を比定する。

一方、後者の難波津に関しては、古くより多くの先学が論究し、上町台地周辺に求めてきた。けれど

も、比定地は一定せず、数カ所に分かれていた。これに決着をつけ通説の位置を占めたのが、1974年に発表された千田稔氏の大阪市中央区三津寺町説であった。本章において、著者はこの千田説をも覆している。従来の諸説が史料と現存の地名をおもな拠り所としたのに対して、当時の景観を復原・検討する過程で諸説の疑問点を明らかにし、結果として大阪市中央区高麗橋1丁目付近を古代の難波津に比定している。未だ決着を見ていないこの問題についても、著者の自信のほどが行間に溢れており、千田氏をはじめとする他の研究者からの反論を心待ちにしているようである。

終わりのVII章には、章ごとのまとめも付されており、本書の中で展開された著者の考えを再確認できる章である。

以上のように、本書はこれまでの自然地理学や歴史地理学が望みながらもなしえなかった、自然と人間の両面から古代の景観を総合的に復原・解明しようとした、新たな第3の研究手法の成果である。復原に際しては、地形・土壌・植生などはもとより、考古学的資料や文献史料や古地図、さらにはこれまでの自然地理学の研究では言及されることのない伝承など、多様な史・資料を復原・検討に用いている。その扱いも手堅くかつ鮮やかであり、十二分に納得のゆく想定を導きだしている。ただ、『日本書紀』の大化前代の記事や内容自体に問題の多い『住吉大社神代記』からの引用・検討に関する部分については、多少の異論も存在すると予想される。

著者自身が最後に述べているように、ジオアーケオロジーで代表されるような学際的研究が一層進められ、他の地域においても本書の中で展開されたと同様の内容・レベルで、古代の景観が鮮やかに復原・解明される日を待ちたい。著者の薫陶を受けた教え子たちによって、その芽はすでに芽生えていると拝察する。

(伊藤 寿和)